

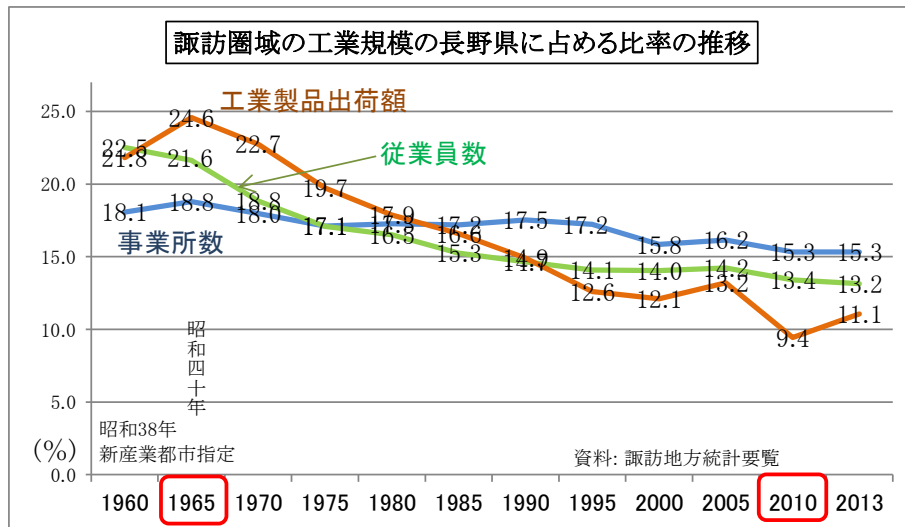
諏訪の工業 その過去と現在 (改訂版)

平成 12 年 2 月に作成したりポートの改訂版 27.6.18 (6.16) 矢島義恭

1 諏訪圏域 6 市町村の工業規模の凋落は止まることがない

- ▶ 昭和 40 年代（1970 年前後）までが諏訪の工業の全盛時代
 - 昭和 38 年に内陸部唯一の「松本諏訪新産業都市」に指定され、高度経済成長と共に大きく発展した。諏訪発祥企業が競って成長し、県内各地より従業員を集めていた。
 - 工業製品出荷額では県全体の 4 分の 1 を占め、従業者数では約 20% を占めていた。
- ▶ 昭和 50 年代以後に成長力が衰え、長野県全体に占める比重は凋落傾向をたどった
 - [図 1] のグラフのように製造品出荷額と従業員数の比重は減少の一途をたどった。
 - 事業所数の比重の減少が小さいのは、諏訪圏域には中小企業が多いことの表れである。
- ▶ 現在の規模は人口比とほぼ同じ 10% 前後の比重
 - 諏訪の県全体に対する人口比は 10% 前後であるが、工業製品出荷額が 10% 前後になったということは、規模では県内における諏訪の卓越性が失われたということである。
 - 諏訪は県内の工業化の先導的な役割を担ってきたという評価と自負があったが、工場用地や労働力の面で限界があり、規模の面ではその役割は終わった。しかし中小企業が持つ高度の技術やその集積、工業力の伝統はこれからの展開の財産である。

[図 1]



年度	工場数
1960	1759
1965	2039
1970	2377
1975	2577
1980	2684
1985	2861
1990	2914
1995	2695
	事業所数
2000	1312
2005	1097
2010	856
2013	809

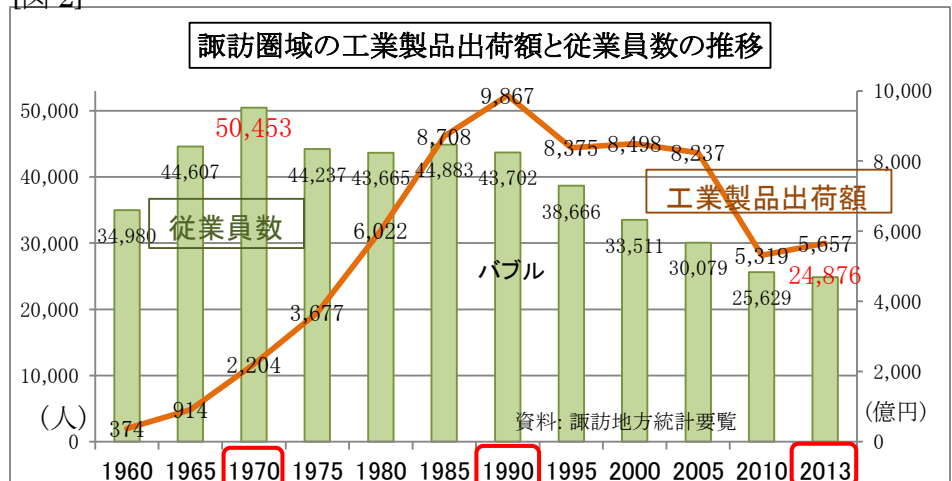
2 バブル期以後の退潮が顕著である

- 現在(2013 年)の工業製品出荷額と従業員数は、バブル期 1990 年の約 57% と半分近くにまで落ち込んでいる。

事業所数も大きく減少している。

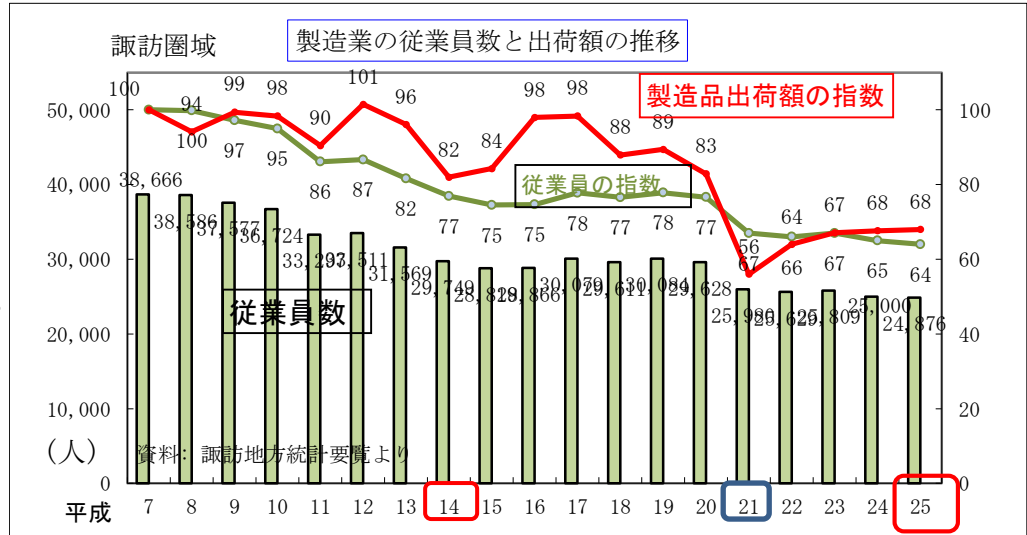
- この退潮が将来的に続くのか、断ち切ることができるのかが今後の課題である。そのためには原因究明と中長期ビジョンの策定・共有が必要。

[図 2]



[図 3]

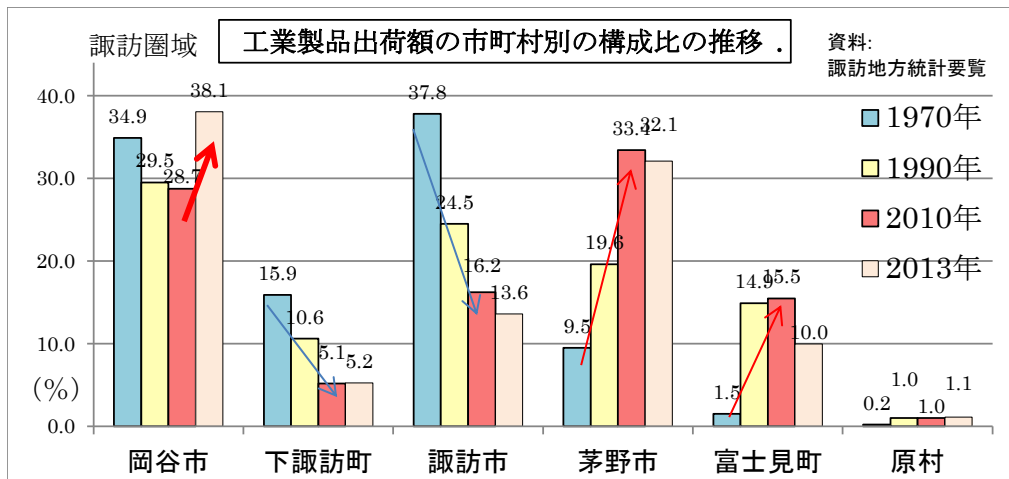
○ 平成 20 年のリーマンショック後の落ち込みが大きい。



3 湖周3市町の退潮と岳麓3市町村の成長、近年の岡谷市の復調

- 湖周3市町の1970年工業製品出荷額は圏域の89%を占め、従業員数でも83%を占めていた。それが、2010年には出荷額では50%、従業員数では55%と圏域のほぼ半分にまで縮小した。下諏訪町と諏訪市の減退がとりわけ著しい。他方、岡谷市の2013年の工業出荷額は2010年の41%増で圏域の首位を奪回しており、その復調ぶりが目を引く。その要因を共有したい。
- 岳麓3市町村の1970年の工業製品出荷額は圏域のわずか11%でしかなかったが、2010年には50%を占めるまでに成長し、従業員数も36%増加している。圏域全体の凋落のなかで、岳麓はその工業規模を成長させてきたといえる。ただし、富士見町は2013年大きく減少した。

[図 4]



[図 5]

